

円板状半月板損傷

橋本 祐介 (はしもと ゆうすけ)

大阪市立大学大学院医学研究科 整形外科

円板状半月板は先天性な形状異常であり、本来三日月状の形が円板状になっている。それゆえに半月板異常可動性や半月板損傷が多くみられる。東洋人に多いと言われ、特に日本、韓国では多くの手術がなされている。組織学的には正常半月板と違い、コラーゲン線維密度が疎でありランダムな走行であることが報告されており、半月板機能としては低いと考えられる。関節鏡視下手術時には多彩な断裂像（水平断裂、縦断裂、変性断裂、放射状断裂）が見られる。術前診断ではMRIが最も有用である。AhnらはMRIで断裂部位を詳細に検討し、半月板が転位していないno shift type、半月板が前方に転位している（後節断裂）Anterocentral shift type、半月板が後方に転位している（前節断裂）Posterocentral shift type、半月板が顆間に転位している（バケツ柄断裂）central shift typeと分類され、この分類によってより術前計画が明確となった。しかしながら過去は術中に半月板変性が強い場合が多く、ともすれば亜全摘、全摘術が施行されていた。近年では半月板実質をできるだけ温存させるような修復術が施行され、温存方法も中心部を切除し（形成）、辺縁部を縫合する方法から、形そのものを温存し辺縁部を縫合する方法まで様々な方法が報告されている。本発表で我々がやってきた形成縫合術の成績と問題点を提示する。